■国際漢字振興協会の設立

現在、世界のあちらこちらの国で、漢字といふ文字の見直しと言ひますか、再発見、再認識の兆しが見られるやうです。特に、私が聞く限りでは、アメリカとアジアの幾らかの国で、そのやうな動きがあるやうです。

一時期、目覚ましい勢ひで経済力を伸ばして来た韓国が、ここの所少し伸び悩んでいるさうですが、その原因の一つに考へられてゐるのが漢字力です。

これまで韓国の経済力を伸ばして来た年代の人たちは、その言語能力として漢字をまだ知ってゐる人たちですが、これから経済を支へて行く年代の人々は、ハソグル文字だけで教育されて来た世代で、漢字を知りません。

昔は漢字を使ってゐて、今はその漢字を忘れてしまった国民は、韓国でなくてもさうですが、まず、それまであった伝統的意識が変ってしまひ、次に、漢字を使ふ上で必然的に備はって来る思考力や推理力といふものが減退するものと思はれます。漢字の底力とはさういふものです。そこで漢字の素晴しさを研究しようといふことで、日本、韓国、中国の学者たちが一堂に集りました。

それは平成3年11月25日、26日の両日に亘り、韓国のソウルで、日・韓・中、3国の漢字研究に携る学者たちの会合があり、それぞれに意見を発表し合ひました。最後に、参加者全員の賛成により、3国に依る「国際漢字振興協会」の設立が決議されました。

私は、「今の世界で真に文字と言へるものは漢字しか無い」といふ事と、「漢字の学習に適した時期は幼児期であり、この時期の漢字学習は幼児の智能を高める働きがある」といふ事の2点について発表しました。

これらの事については、2つとも第二章で述べたものですから、ここではもう触れません。ただ、一般に西欧の学者たちの誤った意見に毒されて、「漢字はローマ字よりも劣った文字である」と思ひ込まされてゐる傾向がありますだけに、私の発表は中国や韓国の学者たちに大変歓迎されたやうに思はれました。私は、それが3国の学者たちが一致して「国際漢字振興協会」を設立することに賛成した理由の1つになってゐるやうに思はれるのです。

もう1つ、この会に出席して驚いたことには、この会に出席した中国や韓国の学者たちが、私の漢字教育に深い理解を以前から有ってゐたことです。中国は、北京と台北とから参加しました。私は、十年ほど前、日華交流教育会議の会長を勤めてゐた折、「漢字の学習は幼児期が最

適である」ことを大いに提唱しましたので、幼児の漢字教育は台湾の方が日本よりも盛んになってゐる事もよく承知してゐましたが、北京でも台湾で刊行された『石井博士の幼児開発法』を頼りに幼児の漢字教育が行はれてゐることを知り、驚いたのです。

韓国の学者たちは、皆、日本語が達者ですから、私の著書など何冊もよく読んで居られて、発表者の１人、社団法人韓国語文会理事長・南廣祐博士は、「私は韓国の石井博士であると自任してゐます」と立派な日本語で私に語りかけてくれた程です。

漢字教育振興協会の会長李在田氏、韓国国語教育学会の会具陳泰夏博士、仁川大学の総長朴在奎博士、万場一致で国際漢字振興協会の会長に推された鄭秉學博士などの方々は、皆、日本語が達者で私の意見をよく聴いて理解して下さり、その理解の深さに兄弟のやうな親しみを覚えました。